主張

人は、何故働くのか

金属労協副議長／電機連合中央執行委員長　中村正武

働くことの最低限の目的

今ごろ考えても遅いのではないか、今さら幼稚なことと失笑されるかもしれない。

あなたは、働く目的を何に求めていますか、という質問に対して「自己実現・成長のため」、「生活の糧（経済的報酬）を得るため」に働く、と答える人が多いだろう。

「何のために働くのか」（著者：北尾 吉孝、平成20年6月発行）によれば、仕事とは人生そのものであり、「働くことが人間性を深め、人格を高くする。働くことは人間を磨くこと、魂を磨くことだ」、「仕事とは修行であり、仕事ができるようになることは、人間として一流になることだ」と断じている。従って、働くのは「自己実現・成長のため」、「生活の糧（経済的報酬）を得るため」というのは最低限の目的であると言いたいのであろう。

仕事という字は、「仕」も「事」も「つかえる」と読む。働きに出ることを「奉公に出る」と言う。これは、「公に奉ずる」、「公に仕える」という意味であるとも言っている。また、働くということは「傍を楽にする」こと、つまりは社会のために働くことであり公に仕えることである。すなわち、仕事とは公のためにするものであり、自分の仕事が誰かの役に立ち、ひいては世の中（社会）の役に立っているという実感が働きがいとなるのである。社会の中で働くことで多くの人とのつながりができ、そのことを通して自分の存在意義を確認することができる。すなわち、この社会で生きていくためには何らかの形で多くの人々との関わりをもち、交わり、つながる必要があり、それを実現する方法が「働く」ことなのである。

「働く」ことを通じて社会への主体的な参加を

「平成20年版労働経済の分析」（通称「労働経済白書」）には、働くことの目的について分析され、その結果、年齢階級ごとに特徴のある傾向が示されている。

20歳代では、「自分の能力や個性の発揮」への意識が相対的に高い。また、30歳代から40歳代においては「お金を得るため」が圧倒的に多く、40歳代後半からは、「仕事に生きがい」への意識を見出そうとするものが多くなり、年齢層が上がるにつれ「仕事に生きがい」への意識が高まっている。

このように、働くことには「お金を得るため」ばかりでなく、仕事を通じて社会に参加すること、自分の能力や個性を発揮することなどの意味があり、職業生涯のそれぞれの局面において、その力点は少しずつ変わっていくのであると分析している。

また、仕事の満足度の推移は長期的な低下傾向にあると報告されている。

この分析は、現在のような経済の論理のみが加速すれば「勝ち組」と「負け組み」がより顕在化し、社会全体の成り立ちが懸念されることを示唆している。

私達は、社会を構成する一員として経済の論理のみに流されることなく、働くことを通じて社会に主体的に参加することが求められているの

である。

仕事を成功させるための基礎となる『徳』

私達の人生で、「よく生き、いい仕事をしていくことは永遠のテーマである」と言われている。人がいい仕事をする、仕事を成功に導くためには一体、何が必要なのか。それを解く鍵が「菜根譚」にある。「菜根譚」には「徳は事業の基なり。未だ基固からずして棟宇の堅久なるもの有らず」とある。この意味するところは、事業（仕事）を成功・発展させるための基礎は〝徳〟であることを説いている。

また、稲盛 和夫氏は、人生の方程式として「考え方×能力×熱意＝人生・仕事の成果」を挙げている。この方程式では、ものの考え方が一番大事であり、考え方が全てであることを言いたいのであろう。いかに能力や熱意があっても考え方が間違っていたら、能力や熱意が大きければ大きいほど、その結果は大きなマイナスとなって表れることになる。

さらに、北尾 吉孝氏は、一人前の大人になるための条件として「知識・見識・胆識をもつ」ことを挙げている。

◆「知識」：良し悪しの判断をするための正しい知識が必要であること。
◆「見識」：倫理的価値観をもって初めて善悪がわかること。
◆「胆識」：自分が正しいと思うことを堂々と行っていくという実行力が大切であること。

すなわち、知識を正しい方向に使う見識、そして見識を実社会で実行する胆識まで揃って、ようやく人物と言えるのである、と説いている。

自分の努力で切り拓く強い意志こそ肝要

さて、財団法人 社会経済生産性本部の「職業のあり方研究会」は、平成20年度の新入社員のタイプを「カーリング型」と命名した。この「カーリング」は、２００６年トリノ・オリンピックでおなじみになった「氷上のチェス」といわれるカーリングである。その命名の理由を「新入社員は磨けば光るとばかりに、育成の方向を定め、その背中を押し、ブラシでこすりつつ、周りは働きやすい環境作りに腐心する。しかし、少しでもブラシでこするのをやめると、減速したり、止まってしまったりしかねない」と発表した。

確かに就職は楽勝だったかもしれないが、昨秋以降、経済の先行きは一気に不透明になった。これからも波瀾万丈の人生や仕事が予測され、決して安心はしていられない。従って、常日頃から「人は、何故、働くのか」を自問自答しながら、自分の将来は自分の努力で切り拓いていく、という強い意志をもつことが肝要である。

仕事は人生そのもの、働くことが人間性を高める

安土・桃山時代の智将、石田三成は、関ヶ原の合戦で徳川陣に破れ、首を斬られた。この石田 三成が処刑されるために京都へ移送された。その移送の途中で一人の侍が石田 三成に「柿でもいかが」と勧めたが、「柿は腹に悪いので」と丁重に断ったと言われている。それを聞いた侍たちは「明日には首を斬られる身でありながら、腹具合を気にするとは信じられない」と笑ったという。その真意を憶測すれば、処刑を前にして身辺をきれいにしておきたい、という気持ちもさることながら、それとは別の視点で今日一日を大切にし、無事に過ごす、今日一日を良く生きる、という信念をもっていたのだろう。そして、このことは永遠のテーマとして捉えるべきであり、その延長線上に仕事があり、仕事とは、人生そのもの、働くことが人間性を高め、人格を高くすることにつながるもの、と考えている。

金属労協（IMF-JC） 副議長
中村 正武
なかむら・まさたけ

1949年6月生まれ。68年日立製作所那珂工場入社。92年日立製作所労働組合中央執行委員。96年日立製作所労組書記長。2000年日立製作所労組副委員長。02年電機連合副中央執行委員長。05年10月電機連合代表副中央執行委員長。金属労協副議長（現在）。06年7月電機連合中央執行委員長（現在）。07年10月連合副会長（現在）